



『言葉は心』

校長 海 頭 巖

小説家、三浦綾子さんの著作『小さな一歩から』に次の言葉が載っています。

「言葉は力である、と私は思う。一言がその命を奪うこともあれば、受けた人の人生を変えることもある。『舌先三寸で人を殺す』という言葉、幼い頃からよく聞いたものだ。言葉というのは理不尽なほどに人間を動揺させ墮落させ、非情に走らせるかと思うと、奇跡のように甦らせ、意欲を与えるものである。」私たちが日頃何気なく使っている言葉が大きな力をもつことをあらためて感じました。

また、『だれかの詩に・・・』

ひとつの言葉でけんかして
ひとつの言葉で涙を流し
ひとつの言葉で頭が下がり
ひとつの言葉はそれぞれに

ひとつの言葉で仲直り
ひとつの言葉で笑い合う
ひとつの言葉でいがみ合う
ひとつの心をもっている

きれいな気持ちのときは、粗暴な言葉は出てきません。しかし忙しく慌ただしくしているときは、言葉もがさがさと粗雑になりやすいものです。児童のことをいとおしく思っている教師からは、けっして憎しみの言葉はでてきません。

どんな言葉を発したか、どんな言い方をしたのかは、言葉の問題です。言った言葉の問題というよりも、そのとき、自分がどんな気持ちで言ったのかが問題なのです。同じ言葉を発しても、いつでも同じ響きになるとは限りません。それが、言葉は発する人の心を垣間見る「窓」と言われる所以でしょう。

「言葉は心の使い」ともいいます。心の中で思うことは、自然と言葉に表れるものです。日々、様々な場面で言葉を発する私たちは、一つひとつの言葉のもととなる自分自身の心をあらためて見つめるようにしたいものです。

まさに『言葉は心』なのです。

あることばを耳にした時、ふとこの詩を思い出しました。

ご家庭でも、『言葉』について考えていただけると幸いです。